

平成29年度「新学術領域研究（研究領域提案型）」中間評価結果（所見）

領域番号	1701	領域略称名	総合稲作文明学
研究領域名	稲作と中国文明－総合稲作文明学の新構築－		
研究期間	平成27年度～平成31年度		
領域代表者名 (所属等)	中村 慎一（金沢大学・歴史言語文化学系・教授）		
領域代表者 からの報告	<p><u>(1) 研究領域の目的及び意義</u></p> <p>本領域では、従来の中国文明研究では軽視されてきた稲作と文明形成との関わりにスポットを当て、考古学を中心に、歴史学、文化遺産学、社会学、地理学、植物学、動物学、人類学、農学、地球化学、年代学等を専門とする多彩な研究者が丸となり、「総合稲作文明学」という新たな学術領域の創成に挑む。具体的には、①アジア稲作発祥地としての中国におけるイネ栽培化プロセスの高精度復元、②長江流域に成立した新石器時代稲作文明の興亡にかかる原因究明、③青銅器時代以降の中国文明において稲作文明が果たした役割の解明、の3点を中心に研究を進める。それらを通じて、稲作に基盤を置く世界で唯一の古代文明としての中国文明の特質を明らかにし、その強靱なレジリアンスの源泉を探っていく。</p> <p>本領域の研究を通して、稲作と中国文明の関係を明らかにすることで、これからの持続可能な文明社会の構築について提言していく。さらに、中国文明が世界の古代文明のなかで唯一、稲作を重要な構成要素とする文明であり、他の諸文明と同じ時間的深度を有することから、中国文明の人類史的意義について西洋中心史観に修正を迫っていく。</p>		
	<p><u>(2) 研究成果の概要</u></p> <p>これまでの2年間、研究はきわめて順調に進捗している。特に3つの研究目的のうち①と②については、新石器時代前期の田螺山遺跡と後期の良渚遺跡群を中心とした調査を通して集中的に研究を進めてきた。その結果、考古遺物の検討による時間軸の設定と地域間関係の解明（A01班）、野生植物と栽培植物を併用する広範囲経済段階から稲作専業経済への移行（A02班）、民族考古学的手法を用いた野生動・植物利用の解明（A03班）、天水田型から灌漑設備を伴う基盤整備型水田への変遷（A04班）、安定同位体分析を用いた食性の解析および雑穀地帯との交流可能性の解明（A05班）等をはじめ、文理融合と研究グループのマスので画期的な成果を挙げつつある。</p> <p>ただし、本領域の目的は、中国文明のレジリアンスの源泉としての稲作文明の位置づけであり、③こそ解明すべき最大の課題である。今後は、長江流域に興った稲作文明がいかんして黄河流域を中心とする他地域の地方文明と融合し、後の中国文明の重要な構成要素となるのか、中国全土の遺跡に目を向けながら調査範囲を拡大していく。</p>		

<p>科学研究費補助金審査部会 における所見</p>	<p>A (研究領域の設定目的に照らして、期待どおりの進展が認められる)</p>
	<p>本研究領域は、考古学を中心とする文理融合的なアプローチによって、中国におけるイネ栽培化プロセスを高精度に復元するなど、短期間に多くの研究成果が得られており、順調に進展している。各計画研究の成果を踏まえた総合的・理論的研究並びに他地域との比較などを取り入れる点などにおいて課題は残るものの、それらに取り組むことによって、新たな文明論としての総合稲作文明学の構築に向けた、今後の一層の進展が期待される。</p> <p>研究成果のうち、9万点の種実同定によってコメ依存度が増す過程を明らかにしたこと、アワ・ヒエの出土確認や人骨同位体分析によって、黄河畑作地域との交流の可能性を示唆したことなどは特に注目に値する。また、中国浙江省・田螺山遺跡において若手研究者育成のためのプログラムを組織し、総合稲作文明学を担う国際的な人材育成に努力している点、公募研究によって中国水利史・農業史の研究者を新たに加えた点なども高く評価できる。</p> <p>今後、計画研究並びに公募研究による新たな成果を統合し、社会の複雑化や国家の起源などのモデル或いはテーゼを、欧米の既存の理論とは異なる形で提示することなどが期待され、新たな文明論として総合稲作文明学を深化させていくことが望まれる。</p>